

前回は白塔についてご紹介しましたが、白塔のある白塔公園に隣接してあるのが「広佑寺」です。この寺院も遼陽市の観光名所の一つですが、数々の運命に翻弄されているのです。もともとこの地には古い寺院があったそうですが、広佑寺として歴史に登場して来るのは、金(1115年～1234年)代で、前号に触れました「清安禅寺」からとなります。第5代世宗皇帝の母の貞懿皇后が、1135年夫の死後北京から生まれ故郷の遼陽に戻って建ててもらったのが清安禅寺というお話をしてしました。

そして彼女の死後、息子の世宗が母の死を悼んで建てたのが白塔です。従ってこの地は世宗母子の魂の宿る地と言えましょう。

白塔公園を歩いてすぐの場所に広佑寺がありますが、その入口に立ち上がるように

「牌坊」がこれ見よがしに屹立しています。「青石牌坊」と呼ばれる巨大な石の彫刻です。高さ16.9メートル、長さ34メートルもあり6本の柱の上に立っています。牌坊は中国独特な鳥居型の装飾用の建築物で、私も中国各地で見かけましたが、確かに巨大と思います。旧時多くの町の中心地や名勝地等に建てられたものだそうです。この周辺では白塔と共に必見の建築物です。

この寺院の案内などを見ると、世界一と自慢できるものが五つあると書かれています。それは――①青石牌坊、②青銅香炉、③大雄宝殿、④木製の金箔

仏像、⑤宮灯、です。何も世界一と表記しなくても欧州やアメリカなどにはこのような文化は無いわけですから、中国一とすべきを何でも世界一と書きたがる夜郎自大の精神が垣間見られますね。本殿の前に置かれている、②の香炉は確かに巨大で100人が一度に線香を立てられるくらい大きさですね。西洋式の湯船の形をしていますが、日本のお寺や神社の前に置いてある玉ねぎ型の香炉は中国にもあるのでしょうか？日本で玉ねぎ型の日本一の香炉はどこ



雪景色の白塔と廣佑寺(中国サイト「遼寧在線」より)

のお寺にあるのでしょうか？③大雄宝殿もこの手の建築物では確かに中国一かもしれません。建物の前に立ちますと威圧感で圧倒されそうになります。瓦屋根が三層に積みあがっていて宮殿のようです。ただ残念ながら広佑寺のすべての建物は後述するように2002年に

再建されたものなのです。しかもそれまでに存在した建物とは異なり、明や清代の建物の風格を加えて建てたもので、何と評価すればいいのか困りますね。確かに大きさだけは中国一でしょうが・・・④の金箔仏像も確かに大きくて光輝いています。中国各地を旅しますと各地で巨大な仏像に遭遇します。この仏像より大きな仏像はいくつもあると思いますが、木製では中国一ということで、他の大きな仏像は鉄製だったり、銅製や青銅製だったり石造りということなのでしょう。最後の⑤の宮灯という言葉は中国語の辞書にも出ていますが、八角形または六角形の

房飾りのついた灯籠のことで、天井からぶら下がっているものです。その昔、宮廷で使われたことからこの名が付いたそうです。大雄宝殿の宮灯はこれも巨大で美しいものです。高さが4メートル、重さが1トンというので一見の価値があります。確かに今の広佑寺は、巨大尽くしで中国人のプライドをくすぐるのかもしれませんがね。

ここで広佑寺の歴史を振り返って見ましょう。前述しましたように1135年頃貞懿皇后のために建てたのが、清安禅寺でした。その後、遼はモンゴル族(元)に滅ぼされ元の時代となりました。元の時代に清安禅寺は、理由は分かりませんが今の広佑寺に改名されました。1368年に元は明に敗れ明の時代となりました。その明が1372年に遼陽を攻撃したのです。明が天下を取ってもこの地方は従わなかったようですね。そのため広佑寺は焼失しました。しかしながら1383年に再建されました。それから500年余りは明から1644年に清が天下を取ってもなんとか無事に経過したようです。ところが1900年に発生した「義和団事件」で、すべての伽藍は灰燼に帰してしまいました。白塔まで及ばなかったのは本当に幸いでした。

義和団事件は、その前から義和団という団体があったわけではなくその背景や経緯は複雑で、全容を正確に述べることは難しいのですが、簡単に書けば次のような事件であったと言えるのではないのでしょうか。1894年～95年の日清戦争で日本に敗れた清国の足元を見て、西欧列国(英、仏、露、独、伊など)及び日本が力づくで中国に租界地などを認めさせ、さらに宣教師によるキリスト教の布教を強引に進めて行ったのが原因と言えるでしょう。民衆がこうした状況に対し排外的な行動をとったのは至極当然であり、義和団という形にまとまり、山東省から起こった紛争が北京、河北省に広がりを見せました。最終的に8か国連合軍は租界地や自国民保護という名目で義和団の鎮圧に乗り出し、制圧した事件でした。

それではなぜ北京周辺の紛争がかなり離れた遼陽まで及んだかですが、実は広佑寺伽藍を徹底的に破

壊したのは、ロシア軍だったのです。ロシアは8か国連合軍に入っていましたあまり鎮圧に熱心ではありませんでした。それより遼東半島の利権に力を入れたようです。日清戦争後の三国干渉で手に入れた東清鉄道の充実に注力したのです。これが1904年に始まった日露戦争の伏線です。東清鉄道の中で遼陽は重要な地点であったことは第1回目で述べた通りです。遼陽の駅を設け周辺にロシア人街を作り上げ、一大要塞化したのです。なぜ広佑寺を壊したのか不明ですが、遼陽駅から近くにロシア軍の訓練用に広い敷地でも必要だったのでしょうか。それから約100年後の2002年に、見事再建したというわけです。このような経過を見る時、いつそのこと世界一と誇れる寺院を作ろうではないかと思ったのでしょうか?もう一つ付け加えれば地下にはいくつにも仕切られた壁に数えきれないほどの金色に輝く地蔵菩薩(中国では地蔵王菩薩という)が嵌め込まれており、信仰心の篤い方は一見の価値があるでしょう。

前回の白塔と今回の広佑寺にかなり紙面を使いましたが、あと一つだけ書いておきたいことが有ります。それは、白塔公園内に「遼陽神社」があったことです。中国民衆からすれば他国に日本の神道を持ち込んでけしからん、ということでしょうが・・・この神社は普通の大きさでどちらかと言えば、こじんまりした神社だと思います。勿論旧日本軍が造ったものですが、実は大連市内にも「大連神社」が建っていました。敗戦後、大連神社の建物の部材は日本に持ち帰ったわけですが、遼陽神社はどうなったのか分かりません。神主さんはいたのでしょうか?いくら戦争を始めても心の拠り所は、必要だったわけですね。今回は、まず清朝の基礎を造り、後金(後の清)初代皇帝の愛新覺羅努爾哈赤(ヌルハチ)を紹介していきます。(つづく)